

聖書の神観は現代の科学的世界観と、果たして、また、
どのように、折り合うか^①

遠藤 徹

一、法則とはどういうものか

法則が実際に存在することを疑う人はいないはずである。

法則は物質ではない。——このことを疑う人もいないであろう。

物質はどんなに小さくても、空間の中のことからここまでと、場所を占めて存在しており、どんなに短くても、時間の中のことからここまでと、一定の期間に存在している。しかし法則がここからここまでの場所に、またここからここまでの時間に、存在するということはない。物質には「大きさ」や「重さ」があるが、法則にはない。物質は必ず見えるが（肉眼で見えなくても、望遠鏡なり顕微鏡なりで）、法則というものは絶対に見え

ない。物体が落ちるのは見えるけれども、落下の法則が見えるわけではない。物体の「重力」や「引力」や「磁力」は見えるわけではないが、その大きさは測れる。けれども、重力や引力や磁力の法則はその大きさを測ることはできない。永遠に不変・不滅の物質というものは存在しないであろうが、法則は永遠に不変・不滅である。

このように、法則は目に見えないが、しかしそうかと言って単に頭の中で思い浮かべられる「観念」とか「想念」ではない。法則はそれに従って宇宙とその中の一切のものがこの今、現に、存在し、変化しているのであり、間違いなく実在している。

ところで、宇宙とは物質世界の最大限の全体である。広辞苑によれば、宇宙とは「時間・空間内に秩序をもつて存在する事物の総体」である。「秩序」をもたらししているものが法則であろう。「事物」とは「物」と「事」、つまり「物」と「物」が引き起こす「事象」のことであろうが、それを究極の構成要素にまで還元すれば、物質であろう。従って宇宙とは物質世界の完全な全体である。この宇宙は静止したままでいるわけではなく、無数の法則に従って、一刻も休むことなく変化している。宇宙は無限に大きいと言われているが、しかしそれが存在し始めた瞬間があったと考えられている。(宇宙は今から約138億年前に誕生した——もちろん法則に従って——というのが一応の通説である。)初めがあるのであれば、いつか終わりがあると考えるのが理にかなっているであろう。こうして、宇宙とは法則の支配の下に存在している、計り知れなく巨大な、と言っても、それなりの時間的長さこそ

れなりの空間的大きさを持っている存在である。——このことは誰もが認めざるを得ないことであるはずである。

宇宙とは「時間・空間内に秩序をもって存在する事物の総体」なのであるから、物質はすべて宇宙の中に、そして時間と空間の中に存在する。時間と空間をいわば存在の「場」として、時間と空間のどこかに位置を占めて、存在している。

しかし法則は、上に見たように、物質と根本的に異なるのであるから、物質のように宇宙の中のどこかに、場所と時間を占めて存在しているということはない。法則は宇宙の中に存在する物質を「支配」して、その物質を宇宙の中のどこかに（一定の場所に）、またいつかに（一定の時間に）、位置づけて存在させているであろう。しかし法則そのものはそれと同様に宇宙のどこかの場所に、いつかの時点に、位置を占めて存在しているということではなく、むしろ宇宙の「外」にあると言うべきであろう。但し「外」と言っても、宇宙の外側の別の場所にあるということではないはずである。宇宙とは自らの内に時間と空間がすべて含まれている世界のことなのであるから、その「外」には時間も空間もないはずである。法則は「時間も空間も存在しない世界」に存在するのである。また宇宙はその中にすべての物質が存在する世界でもあるから、法則が宇宙の「外」にあるということは、法則は物質の存在しない世界に存在するということである。法則は時間も存在せず、空間も存在せず、物質も存在しない世界に存在するのである。²⁾要するに、法則は宇宙とは別のところに、——「どこか」と言っても空間的な場所のことではなく、別の「次元」に——存在するのである。法則は完全に「非物質」であるからそういうことが

可能であり、事実そうなっているのである。法則は電波のようなものでもない。光でもない。電波や光は宇宙の中で働く。電波や光は物質的なものである。電波や光は法則の支配の下で活動している。電磁波や光にはエネルギーがあるが、法則にはエネルギーもない。

法則とはそういうものだと言われると、法則とは何か捉えようがない、何か訳の分からない、心許ない存在に思えるかも知れないが、しかし実際にはそうではないことは、法則は宇宙を、またそこに存在する一切の物質を現に「支配している」ことに明らかである。法則は宇宙の中に存在する一切の「物」（物質的な存在）を時間空間の中のどこかに存在させ、或いは時間空間のどこかへ動かし、変化させ、こうして宇宙の中の一切の物を、いや、宇宙全体を、「支配する」のである。また、宇宙全体まで拈げなくても、現に私たちが生きているこの地上の現実の世界も法則なしには存在しないはずである。従って、そのことを法則は「生きている」と表現することも可能であろう。物質というものは自分だけの力で、つまり「自ら」、みずか「主体的に」動くことはない。「自発性」はない。他のものから動かされてのみ動く。それを「生きていない」と言って正しいであろう。しかし法則はそれとは違う。法則は自らが物質を動かし、地球上の「生物」をも支配している。法則はまさに「生きている」。

その生き方は宇宙の中の地球上の生物の生き方と同じではもちろんない。地球上で最も高度に発達した生物は人間であると言ってよいであろうが、人間が人間として生きていくためには、高度に発達した頭脳があつて、ここからの指令に従って人間の体の大部分が動かかなければならない。法則はそれと同じように生きてはいないであろう。法則に頭脳があるわけではないであろう。しかし、にもかかわらず、法則は宇宙の中に存在する一切のも

のを支配し、動かしているのである。法則の命令に従って、宇宙の中の全物質存在が秩序立って動いている。法則の命令は、人間（もつと拵げれば動物）の発する命令のように音声で行われということではなく、また文字や身振りで行われるというのではないが、しかも確実に宇宙内のすべてのものを従わせているのである。法則が生きていないとどうして言えよう。

そういう不思議な、そして偉大な、まさに何ものをも超えて偉大な、不可視の、最高度に「生きている」何かを、人類は「神」と呼んだ。

これまで法則についていろいろ述べてきたが、しかし「法則」というものをきちんとつかむようになったのはそれほど昔のことではない。人類は長い間「法則」という明確な概念を持つてはいなかった。それを持つようになったのは近代科学が誕生するようになってからである。（ガリレオの「物体の落下の法則」などから始まって）³法則という明確な概念を持つまでは、人類は法則に当たるものを「神」と呼んでいたであろう。しかし法則の明確な概念を持つてからは、人類は「法則と神とはどういう関係にあるのだろうか？」という疑問を持たずにいられなくなつた。「神」とは要するに「法則」のことだという考えの人もいたであろう。いや、神が一番大本の存在で、神が法則を定めた（創造した）と考える人もいたであろう。それは現代でも分からず、永遠に分からないであろう。

「天地万物」——これは今の言葉で言えば「宇宙」であろう——を創造した究極の存在を「神」と呼んでいるのは「聖書」であるが、この聖書を基本にする宗教（ユダヤ教、キリスト教、イスラム教）では、神を一番大本の存在とみなし、法則も神が定めたと見るのが一般的であろう。

もう一つ注目しておくべきことは、今名を挙げた聖書を抛り所にする（聖書を「聖典」とみなす）宗教は、近代科学とは異なって、物質的自然界を支配する法則よりも人間の行動を支配する法則に深く目を向けて来たことである。「行動を支配する法則」とここで言うものは、「人間は、どういう状況に置かれたときに、どういう行動をするか」という法則のことではない。そうではなく、「人間は、どういう状況では、どう行動すべきか」という法則である。倫理的・道徳的・宗教的な法則である。そういう場合、日本語訳聖書では「法則」とは訳さず、「法」とか「律法」と訳して来ているが、ギリシア語でもヘブライ語でもラテン語でも英仏独語でもそういう区別はない。人間のなすべき行動に関しても法則はある。——このことは深く胸に刻み、十分に目を向け、しっかりと考察しなければならない。⁴⁾

二つの法則——つまり物質的自然界（宇宙）に関する法則と人間の行動に関する法則——の間には大きな違いがある。それは物質は自由を持たず、従って法則に従って動かされるのみであるが、人間は自由を持っているから、その行動は法則に従うことも、従わないことも、あり得るということである。

ところで、「人間は自由を持っている」と一般的に考えられているであろう。自由には程度の差があり、無生物には全く自由はないのに対して、生き物には何程か自由があると考えられているであろう。植物に果たして自由があるかは問題であるが、しかし石の固まりが全く自らの力で動くことはないのに対して、植物の種は環境に「反応」して育ち方に違いが生まれる以上、石と比べれば何ほどの「主体性」ないし「自発性」を持ち、何ほどの自由を持つと見るべきであるように思われる。植物は「生きている」とみなされるゆえんである。植物と比べれば、動物はずっと大きな主体性を、従ってずっと大きな自由を持っていると言えるが、しかし人間の主体性・自由は高等動物の「類人猿」のそれをも越えていて、本当に自由を持っているのは人間だけだとも見られなくない。それは、人間だけが**言葉**を語ることができるということと密接であろう。人間が言葉を語ることができるということは人間が**規則を定めることができる**ということと密接である。言葉の規則を定めることができる人間は、言葉だけでなく、生活の全般にわたって様々な規則を定めることができ、それだけ多様な生活形態を持っている。しかし人間が定める規則は、その規模においても、繊細さにおいても、純粹の法則の足下にも及ばない。**法則を定めた存在は**——法則とは別の存在であろうと、或いは法則自身であろうと——**ありとあらゆるものをあらしめた最も「原初」の、「大元（おおもと）」の、存在であり、また完全に「自由な」、そして最も「偉大な」存在である。**それはまさに「神」と呼ぶほかないものであろう。その神は間違いない存在する。存在しないなら、今現にあるすべてのものが存在しないはずである。

こうして、人類が「神」と（或いはそれに該当する名で）名付けて来た存在が存在することは間違いないが、神が持つ力や働きや性質については詳しい分析や説明が必要であり、それは様々な宗教や哲学などで多様に行われ

て来ているであろう。

これまで、神は存在しないと考えて来た人は、以上の主張をどう受け止めるか、答えを求められるであろう。法則を定めた、法則とは別の「神」という存在を認めない人は、法則が一番原初の、大元の、存在であると考えることになるはずであるが、その一番原初の、大元の、ものをなぜ「神」と呼んではならないのか、以上の私の考えに対決する形で説明することを求められるであろう。多くの人は、神は法則と別か、それとも別ではないかの問題には立ち入らずに、万有をあらしめている一番大元のものを、一番大いなるものを「神」と呼んでおり、またそのことに異議はないであろう。⁽⁵⁾

二、聖書の宗教は「神」を更にどうとらえているか

さて、多くの宗教は、以上見てきたような考察まではなしに、もっと直感的にであるにせよ、神の存在を確かなこととして認め、それを敬い崇めるよう指導して来ているのであるが、ここから先は、聖書を聖典としている宗教⁽⁶⁾は神をどういう存在として捉えているかを見て行くことにしよう。

旧約聖書の冒頭は、「神は初めに天地を創造された」という言葉で始まる。まさしく、今の言葉で言えば、「神は宇宙の創造者である」という言葉で始まるのである。

◆天地の創造（新共同訳）

- 1・1 最初に、神は天地を創造された。
- 1・2 地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。
- 1・3 神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。
- 1・4 神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、
- 1・5 光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。
- 1・6 神は言われた。「水の中に大空あれ。水と水を分けよ。」
- 1・7 神は大空を造り、大空の下と大空の上に水を分けさせられた。そのようになった。
- 1・8 神は大空を天と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第二の日である。
- 1・9 神は言われた。「天の下の水は一つ所に集まれ。乾いた所が現れよ。」そのようになった。
- 1・10 神は乾いた所を地と呼び、水の集まった所を海と呼ばれた。神はこれを見て、良しとされた。
- 1・11 神は言われた。「地は草を芽生えさせよ。種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける果樹を、地に芽生えさせよ。」そのようになった。
- 1・12 地は草を芽生えさせ、それぞれの種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける木を芽生えさせた。神はこれを見て、良しとされた。
- 1・13 夕べがあり、朝があった。第三の日である。

- 1・14 神は言われた。「天の大空に光る物があつて、昼と夜を分け、季節のしるし、日や年のしるしとなれ。
- 1・15 天の大空に光る物があつて、地を照らせ。」そのようになった。
- 1・16 神は二つの大きな光る物と星を造り、大きな方に昼を治めさせ、小さな方に夜を治めさせられた。
- 1・17 神はそれらを天の大空に置いて、地を照らせ、
- 1・18 昼と夜を治めさせ、光と闇を分けさせられた。神はこれを見て、良しとされた。
- 1・19 夕べがあり、朝があつた。第四の日である。
- 1・20 神は言われた。「生き物が水の中に群がれ。鳥は地の上、天の大空の面を飛べ。」
- 1・21 神は水に群がるもの、すなわち大きな怪物、うごめく生き物をそれぞれに、また、翼ある鳥をそれぞれに創造された。神はこれを見て、良しとされた。
- 1・22 神はそれらのものを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、海の水に満ちよ。鳥は地の上に増えよ。」
- 1・23 夕べがあり、朝があつた。第五の日である。
- 1・24 神は言われた。「地は、それぞれの生き物を産み出せ。家畜、這うもの、地の獣をそれぞれに産み出せ。」そのようになった。
- 1・25 神はそれぞれの地の獣、それぞれの家畜、それぞれの土を這うものを造られた。神はこれを見て、良しとされた。
- 1・26 神は言われた。「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」

- 1・27 神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。
- 1・28 神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の
上を這う生き物をすべて支配せよ。」
- 1・29 神は言われた。「見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに
与えよう。それがあなたたちの食べ物となる。
- 1・30 地の獣、空の鳥、地を這うものなど、すべて命あるものにはあらゆる青草を食べさせよう。」そのよ
うになった。
- 1・31 神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。夕べがあり、朝が
あった。第六の日である。
- 2・1 天地万物は完成された。
- 2・2 第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息なさった。
- 2・3 この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なさったので、第七の日を神は祝福し、聖別された。
- 2・4 これが天地創造の由来である

まだ自然科学としての進化論が全く誕生していなかった紀元前何世紀も前にこれが書き記されたとは信じ難いことではなからうか。旧約聖書全巻はこの言葉で書き始められるのである。

ところで、既に以下のように記していた。

法則を定めた存在は——法則とは別の存在であろうと、或いは法則自身であろうと——ありとあらゆるものを
あらしめた最も「原初」の存在であり、また完全に「自由な」、そして最も「偉大な」存在である。それはまさ
に「神」と呼ぶほかないものであろう。

さて、この言葉には更に次の一言を添えるべきであろう。と言うのも、植物から人間までが「生物」である、
つまり「生きている」ということの判断基準は、当のものが「自発性」を持っている、即ち「自由である」こと
であった。高等動物の中でも人間が最も高度だと言えるのは、人間こそが最も明確な自発性・主体性を持ち、最
も自由な存在であるからである。ところで、これが事実であるなら、更に次に言うべきではなからうか。

神はありとあらゆるものをあらしめた最も「原初」の存在であり、また完全に自由な存在である以上、神はま
た「完全に生きている」存在である。

もしこれが正しければ、次に問われることは以下のことではないか。

では、「完全に自由で、完全に生きている」とはどういうことか、どういう状態にあることか？

引用した聖書の言葉はこの点について次のように述べているのである。

1・2 地は混沌であつて、闇が深淵の面おもてにあり、神の霊が水の面おもてを動いていた。

「神の霊が水の面を動いていた。」「神の霊が」という表現は、「何ではなくて、神の霊が……」なのか。それは「神の肉（肉体）が」ではなく、「神の霊が」である。「霊」の反対概念は「肉」、言い換えれば「肉体」だからである。⁽⁷⁾神は「肉体」としてではなく、「霊」として存在している。神は霊として存在しているが故に、完全に自由で、完全に生きているのである。しかし、私達はここで決定的に大きな問題にぶつかる。一体「霊」とは何か？

「肉（肉体）の反対は霊だと言ったが、肉体の反対はむしろ「心」ではないか？「心身」と言うではないか。「身」とは「身体」のことであり、「身体」は「肉体」と同じではないか。「霊」は「肉体」の反対、「心」は「身体」の反対、そして肉体≠身体であれば、「霊」は「心」と同じか？

これに対しては、二つは同じではない、というのが聖書の答えである。⁽⁸⁾では、「心」と「霊」とはどう異なる

のか？

二つの決定的な違いは、「心」は人間や動物の中に存在するだけであるが、「霊」はそうではないことである。霊は本来はむしろ人間の外に存在する。そしてそれが人間に宿ることもあるのである。

心は人間の中に存在する。——このことの何よりもの証拠は「心」と訳される言葉は「心臓」という意味も持っていることである。例えば、英語では「心」と訳される言葉は“heart”であるが、“heart”には「心臓」という意味もある。それはギリシア語の“kardia”でも、ラテン語の“cordis”でも同じである。おそらく心の喜怒哀楽の反応には心臓の鼓動の反応が結びついているからであろう。そもそも日本語で血液循環のポンプである臓器に「心臓」（心の臓器）という言葉を当てたところに二つ（心と心臓）の密接さがよく表れている。しかし心の動きは心臓の動きとして感じ取られるだけではない。心の動きや働きは何程か体全体で“体感”されている。そこに「心」全体と「体」（肉体）全体との密接な関係がよく表れている。

しかし「霊」はそれとは違う。霊は本来人間の外に存在しているのである。

しかし人間の外に存在すると言っても、それは人間の外部の空間の中——空中——に存在するということではない。というのも、霊が物質であるなら、霊は人間の外部の空中にあるかも知れないが、**霊は物質ではなく、非物質であるからである。**

では、霊は一体どこに存在するのか？「霊」と「肉(肉体)」との決定的違いは何か。それは肉(肉体)は物質的存在であり、従って常に時間的・空間的世界に属すのに対して、霊はそうではないということである。霊は時間的・空間的な物質的世界とは別の世界に存在する。そのような霊であつて初めて、霊は神の「実体」であり得、且つ「完全に自由であり、完全に生きている」という状態にあり得るのである。

このことから明らかになる重要なことは、霊は生きているが、しかしそれは時空間的な世界で生きているということではなく、非時空間的次元に生きているということである。霊は非時空間的次元で完全に自由であり、完全に生きている。別の言い方をすれば、完全に自由に自らの働きをなすのである。神はまさに霊的な存在として非時空間的次元で完全に自由に生き、完全に自由に働かれるのである。

既に法則は非時空間的次元に存在することを最初に見た。一方神は霊として非時空間的次元に完全に自由に生き、働かれることを今見た。このことは、神と法則の関係は、神が法則を定めたということであることを示唆するであろう。

このような霊的な存在である神を聖書は「聖なる霊」、「聖霊」(Pneuma Hagion *hēnēiōn*)と呼んでいる。神は聖(なる)霊として非時空間的な世界で完全に自由に生き、完全に自由に働かれるのである。⁽⁹⁾

しかし、聖書によれば、聖霊は人間と無関係に存在するのではない。むしろ、人間を救済するように導いて働き、また、必要でふさわしいときには、人間に宿ることもある。ルカによれば、聖霊が処女（おとめ）マリアに降り、神の力がマリアを包み覆っている中で、イエスはマリアの体内に宿り、やがて生まれた。人間であり、しかも同時に神でもある、イエス・キリストの誕生である。

「聖霊があなた（マリア）に降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。」（ルカ1・35）

しかし聖なる霊はイエスのみならず、様々な人間にも降るのであり、聖霊に満たされた人々は神の栄光を顕す様々な大きな働きをしたことが、聖書には多数記されている。そういう人々はイエス・キリストと全く同等に、同じ資格で、聖霊の降臨（こうりん）に与るのではないが、しかしイエス・キリストに倣う生き方をするようになるのである。

ところで、これまで、「非時空的な世界」という言葉を何度も使ってきたが、そんな概念を聖書を書いた人々が持っていたのかという正当な疑問が起り得るであろう。もちろんその通りであり、そこまで明確に、正確に、捉えることはなかった。ただ、しかし、聖書が「天」という言葉で指し示し、思い浮かべていたものは、そこま

で明確にはないにせよ、何程かそういう次元の世界であったとは言えるであろう。それは「地」とは全くかけ離れた別の世界であり、地の「彼方」（あなた）なのである。神は地上を遙かに超えた天に在^あまし、そこから天空に存在する太陽や星の天体を、さらにまた地上の世界とそこに存在するすべてのものを統べ治めておられると考えられている。しかし同時にまた、それにもかかわらず、神はまた私たち人間に言葉を語りかけ、つまり人間の存在する直ぐ傍（そば）にもおられ、さらにまた、私たち人間の内面（心）にすら入り込んで来られると聖書では考えられ、教えられている。物質的なものが別の物質的なものの中に入るときには、言い換えれば時間空間的なものが別の時間空間的なものの中に入るときには、衝突や変化を来たす可能性があり、全く自由に進入することはできない。しかし非時間空間的なもの（天上のものは）は時間空間的なもの（地上のもの、この世のもの）の中に何の衝突も抵抗も来すことなしに全く自由に入り来り、宿ることができるのである。ちょうど或る色彩は別の色彩の中に衝突を来さずに割り込むことはできないのに対して、透明（無色）は何の衝突も来さずに全色彩の中に浸透することができるように。

三、「靈」と（いう元々漢語の、そしてそれを受けた日本語の意味）はそもそも何か

「靈」と聞くと、まず思い浮かべるものは、例えば、「御霊前」とか「霊園」とかではないか。或いはまた「幽霊」ではないか。「亡霊」もそれに続く。どうもあまり芳しくない、気味の悪い、暗い、感じやイメージがつかまとう。それはどうも「死」と密接であり、死んだ人間が到り着く状態のことではないか……。

しかし必ずしもそればかりでないことは、更に調べるとはつきりする。例えば、「靈魂」とは死んだ魂のことではない。「靈驗(れいげん) あらたかなり」などと言うときも、死とは関係ないどころか、その反対である。「靈異(れいいい、りょうい)とは「すぐれて不思議なこと。人知でははかり知れぬこと。神異。靈妙。」と解説される。「靈域」とは「神仏を祭る神聖な区域、神域。」「靈雨」とは「よい雨。慈雨。」である。「あまり聞かない言葉だが、「靈応」とは「神仏の現す不思議な感応」だそうである。(以上『新漢語林』から)

「靈」という語の意味は、それを極めて簡潔に解説している『岩波新漢語辞典』によると、①たま。たましい。①万物の精気。「神靈・山靈・精靈」②人の肉体に宿り肉体を支配する精神。死者のたましい。「靈魂・靈界・靈前・幽靈・精靈(しやうりょう)・全身全靈」②人知を超えた不思議なはたらき。神聖。「靈妙・靈驗(れいげん)・靈葉・靈峰・靈長」とある。

この「靈」という言葉が、旧約聖書の原語であるヘブライ語の *רוח* (ルーアハ) という言葉の訳語に、また新約聖書の原語であるギリシア語の *νεψυχη* (フニューマ) という言葉の訳語に選ばれたのであるが、ラテン語訳聖書では *spiritus* (スピリトゥス) が、英訳聖書では *spirit* (スピリット) が、ドイツ語訳では *Geist* (ガイストウ) が、フランス語訳では *esprit* (エスプリ) が訳語に選ばれた。これらの言葉のほとんどには、「靈」の外ほかに、「息」という意味もあることが解説されている。それと関連するが、「空氣」という解説が添えられる場合もある。また元々の意味は「息」だったとも言われる。なぜ「靈」という言葉が「息」や「空氣」という意味も持っているのか。

まだ自然科学が発達していなかった時代には、「生きる」ということは一体どういうことなのかという問題は極めて深い謎、底知れない神秘だったのではないか。確かなことは、「息をする」ことによって、即ち空気を呼吸することによって、初めて生き物は「生きる」ことができるということであつたであろう。しかし同時にまた「体」が生きているということと並んで、「心」が生きているということもあるということも早くから感じ取られたであろう。さらにまた、その「心が生きる」ということは何によって可能かということも問われたであろう。体が生きるためには息をすることが必要であるが、心が生きるためには何が必要か。答えは、体が生きることは息をするつまり空気を呼吸することによって可能であるが、心が生きることもそれと同様に、ただし心にふさわしい仕方で呼吸をすることによって可能だと考えられたであろう。即ち心が生きることは、心が、体の場合の「空気」に相当するもの——「心の空気」を呼吸することによって、可能になると考えられたであろう。その「心の空気」——物質的な空気ではなく、精神的な「空気」——を指す言葉が「ルーアハ」、「プニューマ」、「スピリトゥス」以下の言葉だったのではないか。そしてまた漢語では、まさに先程見たような意味を持つ「靈」がそれに当てられたのではないか。

こうして、「ルーアハ」、「プニューマ」、「スピリトゥス」……「靈」という言葉はいずれも人間が心において生きること、精神的に生きること、を可能にする、言ってみれば、「精神的空気」である。これらの一連の語は人の中に入りしることによって人を精神的に生きるようにさせる不可視の、神秘的、計り知り難い「精神的な空気」を差す言葉なのである。この空気を息する（呼吸する）とき、人間は、肉体が生きているとは別に、精神的

に生きる。心においても生きる。逆にこの空気を呼吸しなくなるとき、人は心において精神的に死ぬことになる。
——そう考えられたであろう。

そして、霊は最も根源的には神に存在すると考えられたであろう。

こうして、霊とは①物質的世界とは別の世界に存在する、精神的に生きて働くものであると共に、②人間にも何らかの仕方ですべて人間を精神的に生かすものである。人が崇高なものに感動して畏敬の念に包まれたり、聖なるものに感銘を受けて心が聖なる思いに満たされたり、することができるのは人間に宿る霊の働きによる。——こう言ってよいであろう。

このことが先ほど引用した創世記の中のもう一つの、ぜひ目を向けるべき、言葉の正確な意味を解き明かす。

1・26 神は言われた。「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」

1・27 神は御自分にかたどって人を創造された。

いわゆる「《神の似姿》としての人間」である。「《神の似姿》としての人間」ということを「神は人間のよう

な姿・形をしている」と捉えることが如何にひどい誤解であるかはもう十分に明らかであろう。神は霊として存在しているが、霊とは物質的世界ではない世界に、言い換えれば、時間も空間もない世界に存在しているのであるから、肉眼で見えるような姿を持つているはずがないのである。そうではなく、人間は霊の働きを持つ存在、霊を吹き入れられて精神的な活動を持つ存在であるから、霊である神に似ている点がある、霊である神に通じ合うことができるということが真の意味なのである。

ただ、それにもかかわらず、キリスト教徒は神を何程か人間に近しい、親しい、存在としてイメージし、祈って来ていることは確かである。「イメージ」という言葉を余り強い意味で、つまり「人間の姿形」という風に捉えてはならない。ヨーロッパでは中世から近世にかけて天上の神の姿が絵画に描かれたことがあるが、それと同様に人間と似ている神の顔や姿をリアルに思い浮かべて祈っている人はほとんどいないであろう。しかし、だからと言って、全くの空虚なものに向かって祈っているわけではない。「空」(くう)や「無」に向かって祈っているわけではない。何らかの影像に向かって祈っているわけではないけれども、「天の父なる神様」という言葉で呼びかけて祈っているのである。そう呼びかけたからと言って、人間の父親の姿を思い浮かべるといったことは全くないけれども、「今、このときにも、宇宙全体をあらしめておられる究極の方」に向かって言葉を発するのである。「確固として存在しておられる、宇宙万物を統べ治めておられる方」を頭上に意識しながら、その方(かた)に向かって祈りの言葉を発するのである。無感情ではなく、親しみの感情の内に、信頼の気持ちの内に、感謝や懺悔や祈願の言葉を発しているのである。そういう風に祈る道を決定的に定めたのは、イエス・キリストであっ

た。イエスは神を「天の父」と呼び、また弟子達にも親しみの愛の内にそう呼びかけるよう教えたのであった。神が「天におられる父である神」と言われるのに対し、イエス・キリストが「神の子」また「子である神」と呼ばれるゆえんである。

四、神と人間との架け橋となる言葉について

このように神と人間とを緊密に結びつけるのに決定的に重要なものとして「言葉」がある。つまり祈りは神に向かつて言葉を発することによってなされるのである。しかしここで重要な疑問が起こるのであろう。言葉というが、神と通じ合う言葉は一体何語なのか？そもそも神は何語を語るのか？

これについては既に書いたものがある⁽¹⁾ので、それをここに（一部変更の上）導入することにした。

ところで、この人間の「霊」——人間の精神的息吹、精神的息づき、精神的いのち——の究極の源は宇宙万物をあらしめている神の霊だということを知り、それを受け入れて信じ、その神に自覚的に従うときには、そこに全く新しい精神的生き方——神中心の精神的生き方——が生まれる⁽²⁾。神中心の全く新たな「霊的な生活」が生まれる。そこでは人間は神と「霊と霊で交わる」ことができる。神に向かつて祈り、それを受け止められたと感じて生きることができる。三宗教の人は何程かこれを体験して、（——いや、「霊験」に与って、と言うべきか？）いる。

人間が「神の似姿」であるとは、人間の姿形が神に似ているということではなく、何よりもこの、人間が神と《霊対霊》で向き合い、交わり、霊的に生きることができると言うのである。

「祈り」は人間の霊が神の霊と自覚的に交わる第一の道である。

ところで、祈りは多くの場合言葉によるが、しかしそうでない場合もある。例えば、目を閉じて外界（この世）との関わりを絶って、「霊想」（静まり切った、澄み切った黙想）の中で自らの霊で神の霊に触れる、或いは神の霊と一つになる、或いは神の聖なる霊を自身の霊にいわば「吸い込んで」聖化されるなど。霊は物質ではなく、物質的には「無」であるから、透明（無色）が何の抵抗もなしに色彩画全体の中に行きわたるように、神の霊は、法則と同様、この地上の世界の中のごどこにも行きわたり、人間の直ぐ隣に、いや、人間と共に、いや、人間の中にも、人間の心の中にも、存在しておられる。そして霊想の中で、つまり人間が意識を集中して霊のみになり切った状態の中で、人間の霊は神の霊に触れ、一つ（「一体」ならぬ「一霊」？）になることができるのである。

しかし、また、言葉による「祈り」を通しての霊的交わりも可能である。ここで先程の疑問に答えるところへ来ている。——神が人間の言葉を聴いたり、人間の言葉に答えたりすることがあるのか？そもそも神は言葉を語るのか？語るとして、何語を語るのか？

この問題に答えるためには、そもそも法則の中身は何語かを問題にしなければならないであろう。答は「何語でもない」である。法則は言葉で言い表されても、法則そのものは言葉ではなく、物質のあるべき秩序（自然法則の場合）または人間の行為のあるべき秩序（行為法則の場合）である。法則は言語で把握され、言い表されるが、同一の秩序を、把握する者が自らの語る言語にに応じて異なった国語で言い表すことができる。こうして「あなた

の口が、あなたに罪を犯させないようにせよ」と“Do not let your mouth cause your flesh to sin”とは異なつた言語で言い表されているが、法則そのものは、つまり秩序そのものは何語でもなく、ただ一つである。聖書には神が預言者に、とりわけイエス・キリストに、音声で語つた言葉が無数に記されているが、事実は法則、つまり神の意志を預言者やイエス・キリストが自らの語る言語で掴み取つて音声で言い表したのである。確かに、神を信仰する人は、通常は目を閉じて、不可視の神に向かつて、例えば、「神様、どうか私の口からの言葉が、あなたに對して、また他の人々に對して、罪を犯すことのないようにお導き下さい」と祈るが、その言葉は言葉で言い表された法則（秩序）への一致を目指しており、私の意志は神の意志（法則・秩序）従おうとしている。そしてその時私の霊は私の直ぐ隣に、いや、私と共に、いや、私の中に、入り来たっている神の霊の一つに触れていることを感じるができる。神は「天の国」に存在するから、人間である私が存在する「ここ」をはるかに超えた無限の高みに存在すると通常意識されるが、しかしまた、もう一方では、私は心の中で一つに出会っていると意識されるのである。⁽¹⁾

五、人間は神に何を祈るのか、またどう祈るべきか

さて、聖書の宗教を信じる人々は——おそらくあらゆる宗教の信徒も同じであろうが——神に向かつて祈っており、またそうせずにはいられない。しかし祈ることのない人には祈りとはどういうものかという疑問があるかも知れない。

だが、一般人は、どんな人も、絶体絶命の境位に陥ったときには、無条件に「神様！助けて下さい!!!」と叫ぶのではないか。

そういう意見がありそうである。しかし、こう言い切れるのか、私には分からない。ただ、「神様！」と呼びかけるかどうかは別として、「助けてー!」という心の叫びを、誰に向かって発しているのか分からずに、発しているということは間違いなくあるのではないか。発しようと「意志する」ことなどなしに、思わず、つまり「自然に」、「自ずから」、発しているのではないか。

この「自然 (nature)」には紛れもなく人間の自然本性 (nature) が、人間という存在の根本的な成り立ちが、無為の内に、無垢のままの状態で、露呈しているのではないか。神とは本来そういう場面で初めて、根源的に、本源的に、出会うものではないか。

神が先に存在していて、その神に向かって助けを求めるのではない。誰に向かって発しているのか分からずに「助けてー!」と思わず叫んでいる——その先にあるもの、その叫びが向かっている何か、究極的な、絶対的な何か、それが「神」なのである。

この、自然に出会われた「神」とはどういうものかということであらためて振り返り、筋道立って、理にかな

うように、遡って見極めて行くとき、最後に辿り着くもの——それが「一切があるべきようにあらしめている最も大元の存在」であり、私達のこれまでの考察を踏まえれば、「法則を定めた存在」ではないか。

こうして、法則を定めた「全存在の一番大元の存在」を「神」と呼び、その神の全面的な助けを仰ぎ求めるということは、人間にとって最も自然な、最も筋にかなった、ことである。——こう言ってよいように思われる。と同時に、その神に向かってどう祈るべきかということも「自ずから」定まって来ると思われる。

その自ずからなる祈りの最も凝縮された形はやはりイエスによって教えられたであろう。「主の祈り」と呼ばれているものがそれである。

天におられる私たちの父よ、

あなたの御名が聖とされますように。

あなたの御国が来ますように。

あなたの御心が天に行われるのに倣って地上でも行われますように。

私たちの日毎の糧を今日私たちにお与え下さい。

私たちの罪をお赦し下さい。私たちが他人を赦します。

私たちを誘惑に陥らせず、悪からお救い下さい。

あなたの御国みくにと御力みちからと御栄光ごえいこうは永遠です。

アーメン

天（——時空のない別の次元、法則が存在する次元）におられる私たちの「父」である神様、どうかあなたの御名が聖なるお名前としてすべての人から尊び崇められますように。

あなたが統べ治められる御国が地上に実現されますように。

あなたの御心が天で行われていることに従い倣なまって、地上でも行われますように。

私たちの日毎の糧を今日私たちみんなに賜たまわって下さい。

私たちの罪をお赦し下さい。私たちも他人ひとを赦します。

私たちを誘惑に陥らないよう守り、悪からお救い下さい。

あなたの御国みくにと御力みちからと御栄光ごえいこうは永遠です。ただそのみが永遠です。

まことに、アーメン

新約聖書の中で「主・イエス」によって弟子達に教えられたと伝えられる、この「主の祈り」はこれ以上なく凝縮された祈りの手本・模範と見なされるのは当然である。ここには最も簡潔に、しかも必要且つ十分に、祈りの構成要素が示されている。

まず、「1」神への呼びかけがなされ、「2」続いて神の権威が保持・発揮されることへの三つの祈り、「3」

自分たち人間のための三つの祈りがなされ、「4」最後に神の栄光を讃えることで締めくくられる。

「1」神への呼びかけが「天（——時間も空間もない、法則がある次元）におられる私たちの父である神様！」とされる。ここでは、神は「天」におられるということをまず最も重要なこととして確認しつつ、その神に「父よ」と呼びかけることが促されている。これは神を「父」と呼んだイエスと同じ立場に私たちが立つようにとの促しである。ここでイエスはまさに神と人間を「父と子」として結びつけているのである。神に対して自らが立って来た、その同じ立場に人間を招き入れているのである。イエスが「神と人間の仲介者・中保者」とされるゆえんである。

「2」神の権威が保持・發揮されることへの三つの祈りは(1)神の御名が尊ばれ、(2)「神の国」——神が治められる国——が地上に実現し、(3)神の御心が天上と地上で一体になって行われることへの祈りである。

「3」その「神の国」が地上で実現する第一歩は、日毎の糧が今日すべての人に分かち与えられることである。

更にまた「神の国」の実現に不可欠のことは、(i)神の前に自分の罪を悔いて赦しを願ひ、(ii)自分も他の人が自分に対して犯した罪を赦し、(iii)自分が誘惑に陥らずに悪から救われることを祈ることである。

「4」最後に神の栄光を讃えることで締めくくられる。「あなたの御国——神の国——と、あなたの御力と、あなたの御栄光は、永遠に不滅です。」

祈りは原初的には命の危険に際して「助けて！」と叫ぶところから、自ずから、始まるのであった。命の危険は何よりもまず糧の喪失において起こる。しかしそのことだけに留まるなら、それは人間の命の危険における祈

りではないであろう。動物全般の祈りに留まるであろう。人間の人間としての祈りは人間の霊的 (spiritual) 精神的 (生命的) 危険において発せられる。言い換えれば**罪の危険**の中で発せられる。人間が人間として肉体的及び精神的危険の中で「助けて！」と叫ぶ祈りが「主の祈り」であるが、それは当然神を最も大いなる方として意識し、それにふさわしく神を讃え、神の威光を仰ぎ見るよう姿勢を整えられるところから始まらなければならない。神の御名が尊ばれ、神の国 (統治) の到来が祈願され、神の意志 (御心) の地上における実現がまず祈られなければならない。また最後は神の御国 (みくに) と御力 (みちから) と御栄光の永遠性を確信し、褒め称えなければならない。

キリスト教徒の日々の祈りは、この「主の祈り」に倣い、「主の祈り」を土台として、その上に個々人の具体的状況に即した祈願や感謝や賛美を添えることによって行われるのである。

註

- (1) 本稿は『宗教と文化』35号に掲載の「神は、どこに、どのように、存在するか?——ビッグバン理論を踏まえつつ——」と一部重なり合う部分があり、また全体として相補的である。
- (2) ビッグバン理論を踏まえれば、次のように言うこともできる。宇宙はビッグバンによって誕生したが、ビッグバンも法則に従って起こったのであり、ビッグバンを起こした当の法則は宇宙の「以前」に、また「以外」に、つまり時間も空間もない次元に存在するはずである。このことが示すように、非時空的次元に存在する法則が時空的宇宙世界を支配することは可能であり、そのことは宇宙誕生後も一貫してかわらないのである。なお、

我々が現に今属している宇宙の外には更に無数の宇宙が存在する可能性も考えられているようであるが、ここで宇宙に関して述べていることは、そういう宇宙にも当てはまる。法則はそういうすべての宇宙の「外」——非物質的・無時空的世界にある。

(3) ピタゴラスの定理のような幾何学的法則はギリシア時代に既に発見されたが、幾何学的法則は運動の法則のように物質を時空内のどこかに位置づけるように働きかけることはなく、完全な平面に存在する完全な直線で囲まれる理念的な図形に当てはまるものである。それは「非時空的な法則の世界」に存在すると言えても、自然法則が「非時空的な法則の世界」に存在するのと同じ意味においては無い。プラトンが「イデア」の世界と呼んだところのみにみ存在するものである。それは人間の頭脳の中にある「観念」的なものともみなされるものである。

(4) 本稿は聖書の神観と科学的世界観を付き合わせているので、聖書を聖典としない宗教のことは脇に置かれているが、しかし「法」を説き、「空」や「無」を問題にすることもある仏教の教えとは通じ合うところがあるのか、大いに関心をそそられる問題である。

(5) 以上の主張に対して、次のような疑問ないし反論があるかも知れない。——あなたは、近代になって科学的法則が発見される以前は、人類は法則に当たるものを神と呼んでいただろうと言いが、しかし人類が「神」と呼んでいたものはむしろ「自然」ではないか。自然が法則に従って推移・変化しているということを知る以前から人類は神を崇拜していたのであり、その時の「神」とは要するに自然ではないか。雷鳴を「かみなり」と呼んだように、人知を超えて圧倒的威力を持つ自然を人々は「神」と仰いで、信仰していたのではないか。

これに対しては、それはその通りだとまず答えたい。但し、その時に人類が抱いていた「自然」のイメージは、現代の我々が抱く「自然」の概念とは極めて異なるものであったであろう。昔の人間が抱いていた「自然」のイメージは、何よりも「正確なことは不明な大きな謎」であり、「不可解・不可思議な、しかし圧倒的な威力を持つ大いなるもの」であったであろう。ただ、そうではあっても、自然がそのまま神であると捉えられたというよりも、その大いなる謎の自然を支配している更に大元の大いなる存在が「神」だ、或いは、むしろ「神々」だ、と捉えられたのではないか。自然が法則によって支配されているということは近代になって、科学の発達

によって知られて来るのであるが、そこで神と法則との関係が問題にされるようになったであろう。

(6) 聖書を聖典とする宗教としては、ユダヤ教(旧約聖書のみ)、イスラム教(クルアーンと共に、旧約聖書中のモーセの五書、ダビデの詩篇、及び新約聖書のイエスの四福音書)、キリスト教(旧・新約聖書)がある。(塩尻和子『イスラームを学ぼう』二〇〇七年、秋山書店、一四一頁)従っていずれも創世記を聖典中に含む。

(7) 「霊」の反対概念は「肉」あり、従って両者を合わせて「霊肉」と言い表すのが正式である。「肉体」の反対概念は「霊体」だと言ってもよさそうであるが、「体」は肉体のことを言い表すのが普通だから混乱を来しかねない。「肉」と「体」との違いは、「肉」は生物にのみ言えるのに対して、「体」は「物体」とも言われるように、必ずしもそうではないことであろう。ただ、いずれも物質的な存在ではある。

(8) 日本語訳聖書はなぜかマタイ5・3を「心の貧しい人は幸いである」と訳してきているが、この箇所の「心」の原語は“mevuar” (プニューマ) (英訳は spirit) であり、「霊において貧しい人は幸いである」の方が忠実である。「心」と訳されるのは *keqoia* (カルディア) (英訳は heart) であり、「心の清い人は幸いである」(マタイ5・3) の場合はまさにそうである。なお、「霊」と「心」の他に、類似の言葉として「魂」(プシユケー) という言葉もあるが、これはやはり「霊」と対比されることはヘブライ人への手紙4・12「神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、魂と霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろなかえりやかりごとを判別することができます」に明らかである。

(9) 聖書には聖なる霊としての神と別に、悪しき霊(悪霊)というものも存在すると書かれている。両者が拮抗する関係にあると二元論になるが、聖書では悪霊も神に支配される。

(10) 筆者は「イキ(息)」と「イキル(生きる)」とは語源的につながりがあるのではないかと推測しているのであるが、一般には認められていないようである。

(11) 註(1)に記した『宗教と文化』35号に掲載の論文。

(12) 或るキリスト教徒は胃ガンの検査を受ける朝次のように祈ったという。「神様、胃に異常が感じられ、今日検査を受けます。どうぞ、どんな結果になっても、しっかりと受け止めることができるように、お助け、お支え、お守り下さい。もし異常が見つかり、長く生きることができないときには、残された時間を少しでもあなたの

ために、また人々のために、有意義に歩むことができずように。もしなおしばらく生きることを許される場合にも、どうぞその時間を無駄にすることなく、あなたのために、また人々のために、少しでも多くお役に立てるように歩むことができるよう、照らし、示し、正してください、お助け、お守り、お導き下さい。」ここに「神中心に自分の霊的生き方が整えられる」ということがよく示されているであろう。

(13)

神の霊の「意志」の働き(天の父の御心(みこころ)、御旨(みむね)を人間の意志と同じ種類のものとして捉えることはできない。神が宇宙の「外」(「あの世・天の国」に存在する以上、神の「意志」の働きも時間・空間・物質(身体)と無縁であろう。人間の意志は人間に吹き入れられた霊の働き、つまり人間の身体に結びついて働く霊の働きであるから、少しでも永遠的に働こうとする努力は身体の拘束も受けて大きな困難を伴う。神の意志と考えられているものは、端的に言えば、完全に自由である神があらしめる「法則」であろう。ただ、極めて重要なことであるが、神の霊には神の霊的な愛も含まれているから、神があらしめる「行いの法則」は神の愛の法則でもある。神の「愛」(アガペー)は「霊の愛」(ἡ ἀγάπη τοῦ ἐκκλησιαστικῆ)、「霊における愛」(ἡ ἀγάπη τοῦ θεοῦ)、「つまり「霊的な愛」である。キリスト教徒とは、神を「わが父」と呼んだイエスが、何にも増して神の霊的な愛の法則を言葉で説き明かした事実に触れ、中でも愛を實踐できない人間の「罪」を赦す神の愛(「赦しの愛」)を、単に言葉で教えただけでなく、自らの十字架刑によって極限の形で実践した事実に接して、神とイエスを自らの「主」(全面的支配者)として受け入れ、その導きに従って生きることを決意した人々である。(「キリスト・イエスによって命をもたらす霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです。」(ローマ人への手紙 8・2))。

(14)

既に触れた、神の「御顔」とか「御手」とか「御声」とか「御足」といった表現は、文字通りに考えられたり、受け止められたりしているわけではなく、霊である神との今、ここでの、形容し難く深い、親しい霊的な交わりの表現なのである。